

---

# 第二次大戦前のジョージ・オーウェル

——「孤独の人」の物語……『空気を求めて』——

秋 山 康 三

---

1920年代は第一次大戦の「戦後」の時代であり、大戦によって経済的にも大きな打撃を受けたヨーロッパ諸国も、敗戦国のドイツは別として、英米仏などの戦勝国はいずれも急速に立ち直り、20年代も後半に入ると、資本主義は未曾有の繁栄を誇るにいたった。しかし、1929年10月29日のウォール街の暴落に端を発した恐慌は、たちまち世界中に波及し、イギリスでも失業者は巷にあふれ、国家財政は破局に瀕した。いわゆる「飢えた30年代」「悪魔の10年間」が始まったのである。

33年1月、ヒトラーが政権を掌握するに至って、ファシズムの脅威を感じはじめた人々は、はやくも第二の大戦の匂いを嗅ぎとったが、「戦後」としての20年代が過ぎるとほとんど同時に「戦前」の30年代が始まったのである。

## 1

30年代は「暗黒の時代」「赤い10年間」あるいは「マルクスとフロイトの10年間」というようなラベルが貼られたが、この時代について A. J. P. Taylor は次のように述べる。

Its popular image can be expressed in two phrases: mass unemploy-

ment and 'appeasement'. No set of political leaders have been judged so contemptuously since the days of Lord North. Yet, at the same time, most English people were enjoying a richer life than any previously known in the history of the world: longer holidays, shorter hours, higher real wages. They had motor cars, cinemas, radio sets, electrical appliances. The two sides of life did not join up.<sup>1)</sup>

30年代の「赤い10年間」と呼ばれたイギリスで、とくに顕著だったものは、知識人や学生の左翼化であった。イギリス共産党は組織としては微力であったが、スペイン内戦が知識人を捉えることによって、フランスやスペインの人民戦線に似た反ファシズム連合が作られる上で有利に作用した。その特徴は政党や組合の主唱ではなく、出版社と知識人の発案になる The Left Book Club という読者サークルの形をとったこと<sup>2)</sup>であった。

この左翼ブック・クラブはロンドンの出版社 Victor Gollancz が企画して1936年3月に設立されたが、間もなくスペイン内戦が勃発し、このクラブの伸張と左翼化に拍車がかかった。この出版社はスペインに関する書物の出版とともに、討論グループの組織や政治集会・映画会・ロシア語講座などを催し、また、スペイン共和国援助のためのデモや物資輸送などを行った。

ヨーロッパ大陸の西端で1936年7月18日勃発したスペイン内戦は39年3月まで続いた。本来、スペイン国民にとって、また、フランコをはじめとする「将軍たちの叛乱」も悲劇的な歴史の一コマにすぎなかったはずの内乱であった。しかるに、開戦とほとんど同時にヒトラー・ドイツとムッソリーニ・イタリアが大量の武器や軍隊を送って叛乱軍を援助、一方、スターリンのソビエトも軍事顧問団や戦略物資を送って政府軍を支援し、ここに「国際的内<sup>3)</sup>戦」とも呼ばれる性格を帯びるに至ったのである。

## 2

スペインを舞台として、 Kommunismus とファシズムとの間のイデオロギー戦争の性格さえもつことになった内戦は、イギリス国内ではどのように受けとめられたであろうか。

35年に、ヴェルサイユ条約の軍事条項破棄を宣言したヒトラーが公然と再軍備に乗り出したときにも、イギリスでは国を挙げてのジョージ五世の即位25年祭を祝っていた。続いて行われた総選挙で McDonald にかわって首相の座についた Boldwin の挙国内閣は247議席の大差で国民の信任をえていた。反戦・反ファシズムの運動を推進したい左翼は、安定した政府をもつ国内では退潮期にあった。

周知のように、イギリス政府は当初から内戦に対しては不干渉の態度をとりつづけた。フランスでは成立まもないブルム内閣がともに人民戦線(Front Populaire)を名乗ることからスペイン首相ヒラルルの要請をうけて飛行機および小火器・弾薬を売るものと思われていたのにもかかわらず、イギリス側と協議の結果、叛乱軍側にも人民戦線政府側にも援助をしないという不干渉政策をとることになった。

Boldwin 政府はスペイン政府側を援助することがヨーロッパの全面戦争とくにイギリスとドイツとの戦争にまで拡大することをおそれて、ブルム首相を抱きこんで9月には27か国から成る不干渉委員会が設置された。この不干渉ということ自体、合法政府であるスペイン共和国政府から武器購入の権利を奪うものであり、国際法上の通念に反して<sup>4)</sup>いた。なお、フランスの不干渉の決定ももっぱらイギリスの圧力によるとも言いきれず、武器援助を主張する社会党左派および共産党のためにフランス人民戦線の分裂を賭してまで援助を実行しようとはしなかった。すなわち、国内の政治状況に対する配慮が優先したし、右翼の諸勢力はスペイン共和国を「共産主義」と見て、フラ

ンコ側を援助するよう主張し、フランス国内の世論は激しく分裂していた。

ドイツ、イタリアとソ連を含めた27か国の不干渉委員会が、スペインに対するいっさいの武器・軍需品の輸出禁止を協定しながら、ドイツ、イタリアが軍事干渉をしている事態を指摘して、スペイン共和国援助を声明したのはソ連であった。内戦の発生直前にスペインと外交関係をもったソ連が共和国を援助したことは、物質的にも精神的にも共和国側に重要な支えになった。1936年10月から37年末までソ連の救援物資・武器・軍需品など、援助の実態は正確にわかっているわけではない。戦車は100% (900台)、大砲も100% (1550門) がソ連製であったといわれる<sup>5)</sup>。武器は軍事技術者を派遣して扱い方を教え、ソ連軍人の戦闘参加は慎重に避けながら、代わりにコミンテルンを通じて国際義勇軍という形で、共和国側に約35,000人ほどの人員が派遣された<sup>6)</sup>、という。

しかし、ソ連は内戦に軍事的介入を避け、外国から集まった義勇兵が編成された国際旅団にソ連人は参加していない。ソ連が人民戦線政府を援助することが、反ファシズムを標榜する人民戦線戦術をとるコミンテルンの総本山であることを示す絶好の機会であったのに中途半端な関わりあいをしたとしか言いようがない。「ソ連の場合、スペイン戦争で彼らがとった行動の動機はまったくの謎である。」(As to the Russians, their motives in the Spanish war are completely inscrutable<sup>7)</sup>)と述べた G.オーウェル (1903-50) は「1936年にイギリスがスペイン政府に、せめて数百万ポンド相当の武器でも援助してさえいたら、フランコは敗れ、ドイツの戦略は完全に狂ったであろうことは誰の目にも明らかだった。」(In 1936 it was clear to everyone that if Britain would only help the Spanish Government, even to the extent of a few million pounds' worth of arms, Franco would collapse and German strategy would be severely dislocated.<sup>8)</sup>)と断言する。現実には、マドリードは叛乱軍の包囲下にあっても、2年半ももちこたえたのである。

共和国側にはまさに国際的連帯意識にもえた各国の共産主義者が約半数と

見られているが、反ファシズムの立場から自発的にスペインの地に赴いたものも多く、戦場で慣れない武器をとってファシスト軍と戦ったのであった。しかし、スペイン人気質とされる理想への情熱と行動への陶醉は、熱狂的に強烈なイデオロギーの信奉と結びついて、内戦に残忍な傷あとを残した。戦死者数に比して、処刑または報復によって殺されたとみられる数の多いことで、共和国側地域で内戦初期に約2万人、フランコ軍占領地域で内戦中に約20万、さらに内戦後の43年までに約20万人が殺されたといわれていることである。<sup>9)</sup>

内戦はナチス・ドイツにとって将来の戦争の予行演習になった。37年4月26日、ドイツ空軍によるバスク地方の小都市ゲルニカ爆撃、5月31日のドイツ巡洋船艦ドイッチラント号によるアルメリア砲撃などは如実にそれを物語る。爆撃の惨状は第2次世界大戦における都市爆撃を予見させるものであった。

この内戦が共産主義・アナキズム・無神論などに対する聖なる戦いであると呼んだフランコの勝利によって、人民戦線は崩壊し、民衆運動によってファシズムに対抗しようとする試みは失敗した。フランコが内戦の終結を宣言したのが、39年4月1日、同年9月1日にはナチス・ドイツ軍はポーランドに侵入し、第2次大戦へと突入するのに長い時間はかからず、平和な空気を吸った思いは世界の人々にはなかったのである。

### 3

スペイン内戦に政府側に内紛があったこともフランコに名を成さしめる大きな原因であった。<sup>10)</sup> 'a triangular struggle' という Communists, Socialists, Anarchists らの間のはげしい対立と主導権争いは血を見る勢力争いであり、共和国の内情は分裂状態になった。反フランコ陣営の内部分裂の絶頂ともいべき事件は37年5月のバルセロナ事件であり、このバルセロナの市街戦は、

まさに内戦の中の内戦であった。

バルセロナの内戦に個人的にどのように巻きこまれ、また、生き残ったかを証言する人物に G.オーウェルがいる。彼はこの市街戦のあと、ウェスカ (Huesca) の前線に小隊長として出撃、敵の狙撃兵の弾丸で頸部貫通の致命傷を負う。運よく頸部動脈を弾丸がそれたとはいえ、口からは血があふれ、右手は麻痺して動かない。奇蹟的に生命をとりとめた彼の、いささかおどけた口調は読者に苦笑を催させる。

The whole experience of being hit by a bullet is very interesting and I think it is worth describing in detail.<sup>11)</sup>

To be bumped off, not even in battle, but in this stale corner of the trenches, thanks to a moment's carelessness! I thought, too, of the man who had shot me—wondered what he was like, whether he was a Spaniard or a foreigner, whether he knew he had got me, and so forth. I could not feel any resentment against him. I reflected that as he was a Fascist I would have killed him if I could, but that if he had been taken prisoner and brought before me at this moment I would merely have congratulated him on his good shooting. It may be, though, that if you were really dying your thoughts would be quite different.<sup>12)</sup>

「死ぬと思ったときに何を考えるか、それを知ることは面白い、月並だが妻のこと、つぎにこんなふう<sup>13)</sup>にこの世との別れをしなければならないことに對する、はげしい怒りであった」という他人事のようにもとれる書き方だが、この傷が急所をわずかにはずれた運のよさを素直に喜ぶには生々しい体験であった。

オーウェルには長いルポルタージュが二篇あり、この *Homage to Catalonia* (1938) には、戦闘場面に笑いを散在させている（これにくらべて、*The Road to Wigan Pier* (1937) には笑いの片鱗もない）。戦争体験をもち、他の義勇軍兵士と生死の危険を共にした状況では、笑いというかユーモアが生活の潤滑油として必要だったと言えよう。彼が所属していた POUM (Partido Obrero de Unificación Marxista 統一マルキスト労働党) は中央のネグリン政府によって非合法化され、ついに身の危険を感じてスペインを脱出、帰国後ただちに書きはじめたのが、この『カタロニア讃歌』で題名は文字どおりのスペイン人のつくりあげた(短い期間であったが)「社会主義的」社会への讃歌であると同時に、彼がスペイン内戦で味わった「幻滅」の証言記録なのである。

This war, in which I played so ineffectual a part, has left me with memories that are mostly evil, and yet I do not wish that I had missed it. When you have had a glimpse of such a disaster as this—and however it ends the Spanish war will turn out to have been an appalling disaster, quite apart from the slaughter and physical suffering—the result is not necessarily disillusionment and cynicism. Curiously enough the whole experience has left me with not less but more belief in the decency of human beings.<sup>14)</sup>

オーウェルは36年12月「新聞記事でも書こうかというつもりでスペインに来た。だが、着いてほとんどすぐ義勇軍に参加してしまった。当時のあの雰囲気<sup>15)</sup>のなかでは、そうする以外には考えられなかったからである。」といている。ILP(イギリス独立労働党)から紹介状をもらって新聞記者としてスペインに入国したが、現地の革命的気分<sup>15)</sup>に感激し、銃をとって戦うため入隊したのが偶然 POUM であった。それは国際共産党路線に反対し、スペイン共産

党から追放された指導者たちが結成した反スターリン系の小さな派閥にすぎなかった。

内戦後、歳月が流れて書かれたエッセイ、'Looking Back on the Spanish War' (1942) で、二つの記憶が語られる。ひとつは、レリダの病院であり、負傷した義勇兵がもの悲しい声で、「戦うぞ最後まで<sup>16)</sup>の決意!(Una resolucion, Luchar hast'al fin!)」をリフレインする歌を歌う姿であり、もうひとつの記憶は、彼が義勇軍に参加した日に、詰所で彼の手を握りしめたイタリア人義勇兵の記憶である。『カタロニア讃歌』の冒頭に書かれたこの男の、みすぼらしい軍服、けわしい、悲しげな、無邪気な顔を思い浮かべて、オーウェルはレーニン兵舎で会ったこの若者がその後どうなったかに心の痛みを感じるとともに、わずか1、2分見ただけのこの男の顔に、スペイン戦争の本質を思い出すと言う。「この戦争の中心問題は、このイタリア人のような人たちが、生得の権利である人間らしい生活を勝ちとろうとする試み」で、二度と会わず、名前も知らぬこの若き義勇兵に詩を書いて、エッセイを終わりにするオーウェルなのである。

Your name and your deeds were forgotten  
Before your bones were dry,  
And the lie that slew you is buried  
Under a deeper lie;

But the thing I saw in your face  
No power can disinherit:  
No bomb that ever burst  
Shatters the crystal spirit.<sup>17)</sup>

スペインに来てからもしばらくの間は、スペインの政治情勢について、気

にもせず興味もなかったオーウェル、彼は義勇軍に参加した理由を尋ねられれば、「ファシズムと戦うために」と答えたであろうし、「何のために戦うのか」と尋ねられれば、‘common decency’<sup>18)</sup>と<sup>18)</sup>いいきるのである。

#### 4

「いろいろすばらしいものを見て、ついに社会主義を心から信じるようになりました。以前は決して信じなかったのですが」<sup>19)</sup>とオーウェルは37年6月にスペインから Cyril Connolly に書き送った。9年後には次のように回想している。

The Spanish war and other events in 1936—7 turned the scale and thereafter I knew where I stood.<sup>20)</sup>

この二つの発言からうかがわれることは、オーウェルの社会主義へのかかわりは、外的な事件、換言すれば同世代の多くの作家・詩人を左翼にかりたてた、あの1930年代の危機がもたらしたものだということである。彼らに真剣な政治的関心をいだかせた当時の「時代精神」の背後にファシズムの台頭があり、20年代末の大恐慌以来の資本主義に対する不信があった。スペイン戦争は、30年代のクライマックスであり、アメリカ・フランス・ドイツを含めて、数多くの作家たちを南欧の内戦の地へと引き寄せた。

マルローやヘミングウェイなどは別として、イギリスの詩人・作家たちにかぎって考えてみても、この戦争への「参加」のしかたは、それぞれに異なっている。

まず、W. H. Auden (1907—73) は、イギリス救護部隊の一員としてスペインに37年1月に入国したが、実際には軍務につかず短期間の滞在で帰国している。帰国後は政府軍支援のための集会にたびたび出席するとともに、*Spain*

という長詩を書き、その売上金をスペイン医療救援資金に寄付している。

Stephen Spender (1909- ) は、レフト・ブック・クラブの選定書として『自由主義からの前進』を出したのがきっかけでイギリス共産党に入党したが、国際作家会議に出席したり、三度ほどスペインには渡ったが、武器を取って戦うことはしなかった。

Arthur Koestler(1905-83)はハンガリー生まれで40年イギリスに亡命、スターリン時代の粛正をテーマにした『真昼の暗黒』『ホロン革命』などで知られるが、共産党員として新聞記者をしながら同時に、コミンテルンのための宣伝の仕事もさせられていた。前線にいたオーウェルが敵の飛行機の撒くビラで知ったとして書かれているマラガの陥落のさい、ケスラーはファシスト軍に捕えられ、あやうく銃殺されそうになった。その時の経験を書いたのが『スペインの遺書』(1937)である。

中国で教師をしていた Julian Bell(1908-37)は帰国してのち、救護部隊の運転手としてスペインに渡り、まもなく戦死、29年の生涯を閉じた。伝統的に左翼であり、しかも伝統的に支配階級の知識人を自認するベルは、矛盾、錯誤、蹉跌を経験した冒険主義的行動をとる典型的な30年詩人であった。

ベルの生涯にくらべると、いささかの混迷も矛盾も蹉跌もなかったのは John Cornford (1915-36) で、31年秋の労働党の大敗に深刻な衝撃をうけた彼は、一直線に Kommunismus からスペイン内戦参加、そして36年クリスマス直後の死へと突っ走っていった。

そのほか、マルクス主義批評の領域ですぐれた仕事をした Christopher Cordwell は、オーウェルがアラゴン戦線の塹壕にいた頃、マドリード戦線で戦死している。

スペイン戦争を直接経験し生き残った作家たちはいずれ「冷たい戦争」における反共の宣伝に巻き込まれることになるが、オーウェルの場合、利用されたのは、主として『動物農場』(1945)と『1984年』(1949)であった。

スペイン内戦参加で体力を消耗し、胸の病いに冒されて入院したあと、300ポンドの金を借りてオーウェルはモロッコへ保養に行く。38年から39年の冬をマラケシュ(Marrakech)で過ごした彼が執筆したのは小説『空気を求めて』(*Coming Up for Air*)で39年に出版された。39年の3月末までに書かれたこの小説は、主人公ジョージ・ボウリング(George Bowling)をたえず脅かした戦争の予感が的中し、ついに第二次大戦の火蓋が切られる数か月前に世に出たのである。

この小説の梗概は次のようになろう。

ある中年の太った保険外交員ボウリングは45歳、妻と二人の子供たちとロンドン周辺の新興住宅地に一家を構えている。生活力もあり、運をつかむ能力もある。競馬の賭けで思わぬ金儲けをするが、この儲けた17ポンドをもって30年以上も行っていない、美しい田園にかこまれた、のどかな生れ故郷を訪れ、心の安らぎを求めることを思いつが、なにせ妻に話しても自分の気持がわかってもらえるはずもないと考え、仕事で別の場所に行っていることにして故郷のローア・ビンフィールド(Lower Binfield, 『パリ・ロンドンにおちぶれて』(1933)に既出の地名)へと出かける。

主人公は、周囲の状況に現代文明のもつ破壊的傾向を漠然と感じていたが、やはり故郷の町は産業都市に変貌してしまっていた。彼はホテルに数日泊って少年時代の思い出の場所も訪れるが、昔の面影はどこにもない。昔の恋人に街角ですれちがうが、彼女もすっかりふけて太ってしまい、昔の面影はない。

故郷に幻滅感をいだいてわが家に主人公は帰る。商用で出かけたという嘘が妻君の電話からばれていて、てっきり浮気をしてきたと思いこんだ彼女に散々油をしぼられるところで、この小説は終る。

この話の筋からは、戦争の迫りくる不安感と現代文明の自然破壊があるだけで、そのため主人公は心の安息も得られず、幻滅感に終るということから暗さの目立つ小説と思われるが、実はこの作品には「明るさ」とユーモアがにじみ出ているのである。

まず第一に、妻君のことを考えてみても、非情な態度はもちろん、浮気もできない。主人公は、「好きでもない自分の顔<sup>21)</sup>」や外見の肥満体に似ぬ繊細な心の持主で、「14ストーン（約89キロ）をあまり越えていない体重<sup>22)</sup>」だが、少年の頃からではなく、37歳の頃から急に‘as if a cannon ball had hit me and got stuck in side’<sup>23)</sup>ふとってきた男で、自分の太めを人ごとのようにユーモラスに述べる。

He(=a fat man) can't ever be present at a tragic scene, because a scene where there's a fat man present isn't tragic, it's comic. Just imagine a fat Hamlet, for instance! Or Oliver Hardy acting Romeo.<sup>24)</sup>

やがて否応なしに戦争への道に突入していくことを、そして「爆弾の破裂者」への不安が忍び寄っていく時代の息苦しさを読者に仄めかしている。

Mind you, I haven't always been fat. I've been fat for eight or nine years, and I suppose I've developed most of the characteristics. But it's also a fact that internally, mentally, I'm not altogether fat. No! Don't mistake me. I'm not trying to put myself over as a kind of tender flower, the aching heart behind the smiling face and so forth. You couldn't get on in the insurance business if you were anything like that.<sup>25)</sup>

主人公が生活にたいして自信をもち、どんな時代になっても生きのびてゆ

きたい願いは、そのまま、作者オーウェル自身の自信でもあり、上述の引用文に続けて次のように描写する。

I'm vulgar, I'm insensitive, and I fit in with my environment. So long as anywhere in the world things are being sold on commission and livings are picked up by sheer brass and lack of finer feelings, chaps like me will be doing it. In almost all circumstances I'd manage to make a living——always a living and never a fortune——and even in war, revolution, plague, and famine I'd back myself to stay alive longer than most people. I'm that type.<sup>26)</sup>

一人称小説の形をとった、この『空気を吸いに』は、著者オーウェルが「これまで一度も取扱ったことがなく、今でも適切に書きあげるには時間が足りないという大きなテーマがひらめいた」と38年12月26日、モロッコから友人の Jack Common に宛てて書く。また、「大層漠然としているが、数巻にも及ぼうという大型小説の着想も得たが、仕上げるには数年おちついた安らぎが必要になる。もちろん、安らぎと僕の言っているのは戦争のない状態を言っているのではないんだ。戦闘中でも人間は落ちついていられるものだから<sup>27)</sup>」と書き加えている。

この前に7月8日付の Cyril Connolly 宛の手紙ではほぼ半年の療養でかなり健康を回復し創作活動をまた始められる希望と自信がうかがえる。

I am much better & most of the day out of doors. I still haven't done a stroke of work but keep toying with the idea of starting my novel. One good effect the rest has had on me is that it has made me feel I can write a novel again, whereas when I came here I felt my novel-writing days were over.<sup>28)</sup>

彼の言うmy novelとは『空気を求めて』であり，取り戻したかに思える希望や自信も戦争の予感にうすれてしまうのである。次に引用する手紙は同じConnollyにあてた同年12月14日のものであるが，重苦しさが伝わってくる。

Everything one writes now is overshadowed by this ghastly feeling that we are rushing towards a precipice and, though we shan't actually prevent ourselves or anyone else from going over, must put up some sort of fight. I suppose actually we have about two years before the guns begin to shoot.<sup>29)</sup>

戦争になれば，本の出版が続けられるものかどうか，誰にもわからない。

To me the idea of war is a pure nightmare. Richard Rees was talking as though even war couldn't be worse than the present conditions, but I think what this really means is that he doesn't see any peace-time activity for himself which he feels to be useful. A lot of intellectuals feel like this, which I think is one explanation of why the so-called left-wingers are now the jingoes. But I personally do see a lot of things that I want to do and to continue doing for another thirty years or so, and the idea that I've got to abandon them and either be bumped off or depart to some filthy concentration camp just infuriates me. Eileen and I have decided that if war does come the best thing will be to just stay alive and thus add to the number of sane people.<sup>30)</sup>

38年末にオーウェルは，「病気をしたりしたこともあり，38年という年は空

白の年に数えて、カレンダーから消してみるようにも決めたが、その間、強制収容所が大きく前面に姿をみせてきたので、やりたいことが多い<sup>31)</sup>と書いていた。また、半年前の6月、'Why I Join the ILP'という約800語ほどの短い文章でILP（イギリス独立労働党）への入党の理由を党の週刊誌 *New Leader* に発表した中で彼は次のように言っている。「作家たちは政治の外にとどまりたいと望んでいるが、'ゴムの棍棒と強制収容所'の新しい時代にはこういう贅沢な願いは許されないであろう<sup>32)</sup>」と。「彼が友人たち、Common, Connolly, Read, Gorer にあてた本国への手紙には、迫りつつある戦争についての思索と、帰国すれば強制収容所行きという乾いた冗談半分の話題が圧倒的に多かつた<sup>33)</sup>」とは政治学者 B. Crick（1929- ）の記述である。

## 6

The idea really came to me the day I got my new false teeth.

I remember the morning well. At about a quarter to eight I'd nipped out of bed and got into the bathroom just in time to shut the kids out. It was a beastly January morning, with a dirty yellowish-grey sky.

これは『空気を求めて』の書き出しの部分である。読者がこの小説の主人公に気軽に接するようにと作者がしむけながら、主人公にこれから何か現代批判と不気味な未来の到来を予測させる書き出しでもある。

Bowling という主人公を誕生させるために、作者は面識のある保険外交員に「週給5ポンドで郊外に家をもつ」男に適切な職業は何か、少しは車を乗り廻す機会をもち「いくらか本好き」といえるにはどのような生活状態になるか、教えてほしいと手紙で依頼している<sup>34)</sup>。

この小説の表題になったのは、作者がつけていた家庭日誌の11月13日に記した「亀は水中に長くいるときは必ず空気を求めて水面に上ってくるようだ<sup>35)</sup>」

の意味するものは、「水面まで浮かびあがって鼻づらをつき出し、美味しい空気を心ゆくまで吸いこんだあと、海草と章魚たこの間に潜りこんでゆく大海亀のように」「空気をもとめること」(‘coming up for air,’ ‘like the big sea-turtles when they come paddling up to the surface, stick their noses out and fill their lungs with a treat gulp before they sink down again among the seaweed and octopuses’<sup>36)</sup>), つまり、逃避の隠喩であった。

主人公の妻は結婚前の魅力は失せ、やせて干からびたようになった39歳の女性で、消費生活の値上がり、子供の靴の代金、教育費、ラジオの月賦の支払いとか、家庭生活の安定感を求めるあまり、惨めな雰囲気あつまいを自然につくりあげる。二人の子供もかなり粗暴というのでは、家庭が心の拠り所にはならない。

たしかに時代も、代用品という名のものが幅をきかすようになり、John Wain も「肉の代わりにソーセージの中身は魚に代ってしまっている」(‘fish is the stuff they put into sausages instead of meat’<sup>37)</sup>)と書いている。日常の食生活に関係深いものが無味乾燥になったことが、主人公ポーリングがストランド街のミルク・バーに入ってコーヒーとフランクフルト・ソーセージを一皿注文するところに劇的に示される。彼は出されたソーセージをがぶりと噛む。くさった梨のようなもの、味わい直せばなんと魚であった。

It gave me the feeling that I'd bitten into the modern world and discovered what it was really made of. That's the way we're going nowadays. Everything slick and streamlined, everything made out of something else..... But when you come down to brass tacks and get your teeth into something solid, a sausage for instance, that's what you get. Rotten fish in a rubber skin. Bombs of filth bursting inside your mouth.<sup>38)</sup>

上の引用文では“streamlined”という語をわざわざ“slick”と頭韻を合わせているが、主人公ジョージ・ボーリングはこのミルクバーを出た直後には義歯（総入れ歯）を入れてもらうのである。

味覚の低下を示すこの挿話に加えて、住宅、都市など人間の囲まれた環境に美観と美的要素が退化し、田園も醜怪な都市へと様変わりする。オーウェルは「われわれをとりまく醜悪さには精神的、経済的原因があるので、すべての点で伝統の逸脱からとだけで説明のつくものではない<sup>39)</sup>」と述べているが、機械文明が破壊された過去の美にかわって新しい美を創造することは可能ではない。美意識の衰退、そしてモラルの崩壊が働くからである。

The Past is a curious thing. It's with you all the time, I suppose an hour never passes without your thinking of things that happened ten or twenty years ago, and yet most of the time it's got no reality, it's just a set of facts that you've learned, like a lot of stuff in a history book. Then some chance sight or sound or smell, especially smell, sets you going, and the past doesn't merely come back to you, you're actually <sup>40)</sup> *in* the past.

George Woodcock はオーウェルが愛した時代は理想的な時代とは言わないまでも19世紀であり、第一次大戦が始まった1914年には終わりはじめていたことを指摘しているが、未来に対する不安や恐怖がなかったという意味ではまことに平和であり、主人公ボーリングも生れ育った時代が現在に比べ楽であったわけではなく、今よりつらかったと認めながら、この時代が安定していたことを「文明は象のように四本の足を地につけて立ち、未来のごときは気にもならない時代」（107－8頁）と説明している。この点については史家 A. J. P. Taylor も次のように証言している。

Until August 1914 a sensible, law-abiding Englishman could pass through life and hardly notice the existence of the state, beyond the post office and the policeman. He could live where he liked and as he liked. He had no official number or identity card. He could travel abroad or leave his country for ever without a passport or any sort of official permission. He could exchange his money for any other currency without restriction or limit.…………… Unlike the countries of the European Continent, the state did not require its citizens to perform military service.<sup>43)</sup>

主人公ジョージ・ポーリングの記憶では、田園の田舎町 Lower Binfield を舞台とした、美しい、楽しい、豊かな自然が定着している。「私」の思い出では、田園はいつも夏であった。

Before the war, and especially before the Boer War, it was summer all the year round. I'm quite aware that that's a delusion. I'm merely trying to tell you how things come back to me. If I shut my eyes and think of Lower Binfield any time before I was, say, eight, it's always in summer weather that I remember it.<sup>44)</sup>

彼の田園や自然に対する憧憬は、オーウェルの多くの作品に見られるものであるが、この作品においても文明の破壊の手が及ばなかった頃のよき時代として、美しさが極めて印象的である。柳の下の緑の色の池、遠い青い森、テムズ川に広がる水紋、丘の上の白亜の館の裏手には静寂の中に忘れさられたような池など、たまたま、新聞の見出しに使われた「キング・ゾグ」(King Zog, 1895-1961, アルバニアの首相, 大統領, イタリアの侵入で追放(1939), 1928-46王位) を目にして、突然38年前の生れ故郷の思い出に浸

る。

I don't idealise my childhood, and unlike many people I've no wish to be young again. Most of the things I used to care for would leave me something more than cold. I don't care if I never see a cricket ball again, and I wouldn't give you threepence for a hundredweight of sweets. But I've still got, I've always had, that particular feeling for fishing. You'll think it damned silly, no doubt, but I've actually half a wish to go fishing even now, when I'm fat and forty-five and got two kids and a house in the suburbs. Why? Because in a manner of speaking I *am* sentimental about my childhood—not my own particular childhood, but the civilisation which I grew up in and which is now, I suppose, just about at its last kick.<sup>45)</sup>

## 7

さらに語を続けて「どういうわけか、釣はこの文明を典型的に表わしているのだ。釣のことを思い浮べると、現代世界に欠けているものが何であるかが分るのである」<sup>46)</sup>

The very idea of sitting all day under a willow tree beside a quiet pool—and being able to find a quiet pool to sit beside—belongs to the time before the war, before the radio, before aeroplanes, before Hitler. There's a kind of peacefulness even in the names of English coarse fish.…… The people who made them up hadn't heard of machineguns, they didn't live in terror of the sack or spend their time eating aspirins, going to the pictures and wondering how to keep out

47)  
of the concentration camp.

roach, rudd, dace, bleak, barbel など魚の名前とともに、どういう魚にはどういう餌がよいか、餌はどういうところで入手するのか、どういう魚にはどういう釣竿がよいか、など博識ぶりを披露する。主人公の魚釣りの思い出に何度もつきあわされる読者は、「もしも平和な時代だったら私は装飾的な本か、単に描写中心の本などを書いたかもしれない<sup>48)</sup>」といったオーウェル自身の感傷とともに、ボーリングに魚や魚釣りを繰返し語らせる作者の手法を見出す。いろいろな魚はボーリングの意識の中で成長していくと、Lower Binfield の町全体が流線型の「鯨」になり、「鯨の腹の中のヨナ」(Jonah's in the whale, 34 頁)への憧憬へと主人公をかりたてていく、これは作者の計算ずみのことである。

さて、「空気を吸いに」Binfield へ行くといわずに、バーミンガムへ仕事で行くといってボーリングは家を出る。出かける決心をするまでに約5か月かかっているが、競馬で儲けた金を町への再訪に使おうと考える。「30年にあれだけ大きかったから、今はものすごく大きくなっていることだろう」と鯉への思いをつのらせた主人公だが、よく魚釣りをした大きな池は「死んだようにみえ、魚はいなかった」し、うっ蒼と茂っていたブナの木々もなく、「ビンフィールド・ハウス」は「精神病院」に、ボーリングが少年の日にひとりで見ただきな鯉のいた池は「ごみ捨て場」に変わっていた。町全体がまるでなにかに「呑みこまれた」(179 頁)ように昔日の面影は残っていなかったし、昔のローワー・ビンフィールドを知らぬ人は当然見知らぬ人としてしか主人公を見なかったのである。

I'd wasted the last five days on. Sneaking off to Lower Binfield to try and recover the past, and then, in the car coming home, thinking a lot of prophetic baloney about the future. The future! What's the

future got to do with chaps like you and me? Holding down our jobs  
—that's our future. As for Hilda, even when the bombs are dropping she'll still be thinking about the price of butter.<sup>49)</sup>

故郷に幻滅して、わが家に引き返す途中、車の中で主人公はロンドンの800万市民のことを考える。「爆弾が落ちようと落ちまいと、なんとか今までどおりの生活を続けていくさ。」(225頁)と、庶民の一人としての逞しい生活意識を作者はボーリングに託している。

ともあれ、「第一次大戦前の少年時代の思い出」を追って「太りすぎた、赤ら顔の義齒」の中年男が、競馬で手に入れた「17ポンド」を持って「中古車」に乗り、心はずませて出かけたものの、故郷に吸える空気はなく、1週間の予定も5日で切りあげてわが家に向うのだが……。

ラジオの「奥様のヒルダ・ボーリングは重態です」という、近親者特別呼出し放送(S. O. S)で妻の身を案じて帰ってみれば、妻は寝込んでいるどころか、彼が言い置いていたホテルに泊っていなかったことを知っていて、外泊理由を詰問される。この小説の結末は、楽天的なはずの肥満体型の主人公の周章狼狽ぶりに笑いを誘われる。隠しごとをどう弁明するか、妻とのいさかいと、ヒトラーとの闘いをからませた締めくくりは次に引用するとおりで興味深い。

All I wanted was the line of least resistance. And in my mind I ran over the three possibilities, which were:

- A. To tell her what I'd really been doing and somehow make her believe me.
- B. To pull the old gag about losing my memory.
- C. To let her go on thinking it was a woman, and take my medicine.

50)

But, damn it! I knew which it would have to be.

ところで、滑稽ではあるが不自然さを感じさせる場面がある。それは、生れ故郷をめざして、いざ車を運転して走り出そうとするときおそわれる奇妙な幻覚である。妻君のヒルダ、近所の主婦、会社の同僚、内務大臣、ロンドン警察、ヒトラー、スターリン、ムソリーニ、ローマ法王それに主教たちが群がって追いかけてくるが、ヒトラー、スターリンにローマ法王が、幻想の世界に登場するのは、と読者は不審な感情をいだく。1914年以前の子供の頃の思い出に浸ることがボーリングに何か罪深い気持ちにさせたとしても、「タ<sup>51)</sup>ンデムの自転車に乗ったヒトラーとスターリン」が保険外交員の中古車を追いかけている図に突飛さを感じて笑わざるをえない。不自然に思えるものの、最高の権力者ふたりを相乗り自転車に乗せることで、戯画化したという見方が成り立つからであろう。なお、独ソ不可侵条約が結ばれたのは、第二次大戦直前の39年8月であった。主義・思想・性格もまったく相反する両者の西側陣営を欺く協調ムードには、作者オーウェル自身が強い戦争への恐怖感を意識していたからである。

## 8

1930年代のイギリスの知的な面を特徴づけ、毎月橙色の表紙の本を1冊会員に廉価販売し、会員を対象として講演会を開いてもいたレフト・ブック・クラブに、会員であるジョージ・ボーリングは「有名な反ファシスト」が「ファシズムの脅威」と題した講演を開きに出かける。講演者はヒトラーへの憎悪をひたすら声を大にして叫びたてる。スローガンの羅列のようなこの講演、「聞いている人間の頭の中に何かハンマーのようなものが入りこんで、脳髄を叩きまくっているような感じ」(148頁)で、「もし、この男の体を切り裂いてのぞけば、みつかるのは民主主義—ファシズム—民主主義だけだろう……

多分この男の夢でさえスローガンに充ちあふれていることだろう」と主人公に呟かせる。

This fellow, I suppose, makes his living by writing books against Hitler. But what did he do before Hitler came along? And what'll he do if Hitler ever disappears?<sup>52)</sup>

ボーリングは、「奇妙な職業だ、反ファシズム屋とは」と批評し、来たるべき未来の姿を悟る。

Hitler's after us! Quick! Let's all grab a spanner and get together, and perhaps if we smash in enough faces they won't smash ours. Gang up, choose your Leader. Hitler's black and Stalin's white. But it might just as well be the other way about, because in the little chap's mind both Hitler and Stalin are the same. Both mean spanners and smashed faces.<sup>53)</sup>

ボーリングはこの講演の直後、心のやすらぎを求めて Porteous を訪ねる。パブリック・スクールの退職教師である彼は、「背はたいそう高く、灰色の巻毛で、少し色つやは悪いがほとんど少年のものと見えるようなやせて夢みるような顔」(153頁)の知識人として登場、独身でパイプと蔵書を生活の友としている。古典の世界に生きる彼は、話の糸口は何であろうと話題は必ず数世紀のでき事に戻っていく。Keats, Wordsworth そして少数の詩人を除いては、彼には現代は起こるべきでなかった世界と考えられない。現実を無視し、隔絶しているがゆえに、現代が破壊される傾向の現実に不安をいだくボーリングは頼りになる人物にうつる。しかし、彼の教養はボーリングの不安に答えられず、不安の意味も理解していないことに気づく。彼は、左翼図書クラ

ブの講演者が進歩を代表するものであれば、Porteous は教養を代表すると考えていたのだが、その教養は現実のなかで息づいていないのであった。「彼は死んでいる。亡霊なのだ。」(159頁)とボーリングに言わしめる Porteous だが、主人公のその後には心理的な動機づけを与える存在としてこの小説に組みこまれている。

ヒトラーはわれわれの知っているタイプとは異質の、まったく新しい型の独裁者ではなかろうかと主張するボーリングに、Porteous はヒトラーはただの山師、気にかける要なし、と一向に動じない。この世に新しいものなどない(157頁)、と言って書架から古典を取り出し、ギリシャの暴君についての個所を読み聞かせる、古典の呪縛を受けている知識人、そして、固定観念が邪魔をして現実を正しく認識することも、解決能力ももたぬ人間だが、取り柄は善良さを作者オーウェルから与えられている。

主人公の母親と妻の Hilda を比較すると主婦の座にも変化があったし、対照的な時代に生きた女性像に描かれている。「料理をしているときの母は、本当に自分の理解するものに囲まれて自分の世界に安住」していたが、アイルランドがイギリスのどちら側に位置しているか、第一次世界大戦が勃発したときのイギリス首相は誰だったかも意に介さず、だが殺人事件の記事(殺人の仕方が現代の残酷さのみの時代ではなかった)を読むのを無上の楽しみとしていた。この母の安住する狭い世界が、実は「誰にとっても十分に広かった」のであった。ただ、Lower Binfield ではほとんどの家も衛生的ではなかったので、主人公は「諸君は青バエの音と爆撃機の音とどちらを聞きたいと望むか」(Which would you sooner listen to, a bluebottle or a bombing

<sup>54)</sup>plane?と問を発するが、この小説の主題を要約した問といえよう。私的世界が確保されていた過去の人びとと同じく過去に属することをよしとした主人公は「今の人から失われてしまっている何かを、あの頃の人びとが持っていたのは確か」と現在より生活が厳しかったものの、過去につながる思い出の中の母であった。一方、ヒルダは家庭の中に安定も充足も見出せない、影の薄

い、やせた姿で小さな世界のささやかな不安に向けられている。夫のボーリングに言わせれば、戦争、地震、疫病、飢饉、革命などの不安に目はむけないといっても左翼図書クラブに入会し、例の講演会には出かけ、時代の恐怖から免れることはできない。『牧師の娘』のドロシーと同じく、彼女の性格や行動は「身分ある者の貧窮」(respectable poverty)から生れてきたものであり、この階級の貧窮感は文明社会にあってはその進歩とともに深刻さが感じられるもので、節約のため彼女はろくに娯楽も趣味も持たないのである。当然のことに妻に愚痴られるボーリングは、妻を「殺してやりたい」(135頁)と真剣に考えたり、別居や離婚を考えたりで、「好きでもない自分の顔」(226頁)のように妻のことを考える。彼の内心の自由はさておいて、『ビルマの日々』のフローリのように女を困ったり、『1984年』のウィンストン・スミスのように非情な態度をとったこともない。彼自身が「金、金」と金銭を口にするヒルダの言葉を15年間つきあって聞いてきたが、金への反逆心も憧れも持ちあわせてはいない平均的な亭主では妻に文句をつけられるはずもないかもしれない。彼にとって夫婦間の言い争いが(例えば、朝食のマーマレードに「一定量の無害果汁」含有の小さな文字で印刷されたラベルからもちょっとした論争が起こっている)あるにしても無難な家庭生活と言えるであろう。ヒルダに楽天性と快活さを与えては、この作品はまったく成立しなくなるからである。

主人公には、黒い服のよく似合う「すごく女らしく、素直でおとなしく、上品」だった恋人 Elsie Waters がいた。ボーリングにとって、よき時代の美と安定の象徴である田園の自然のなかで展開される彼らの牧歌的な逢引きは「戦争前の一部、あの情景の一部」として、長い夏の夜に、簡潔ながらあざやかに語られている挿話は、オーウェルの作品中でもっとも健康的な恋であり、田園美の構成要素としてはたす役割は大きい。

「あなたが眠っている間も監視する刑事たち，行進と巨大な肖像，百万の群衆が指導者に歓呼の声をあげる。耳をつんざくほどだ。彼らは指導者を尊敬していると思いきりこんでいても，心の底では吐き気を催すほど指導者を憎悪している。」(149頁)と，ファシズムの脅威を訴え，その対抗には団結を，と訴える講演者に思いをはせるボーリングには，スペイン内戦参加者の作者オーウェルの想像ないし意識が重なってくる。『空気を吸いに』が一人称小説の形態をとって主人公の脳裡に浮かんだこととして語らせることの心理的抵抗が作者にあったのであろう。この作品が書かれた10年後の48年5月10日付のJulian Symons への手紙では，この友人が「私自身の性格を語り手に押しつけている」という意見に同意して，次のように述べる。

I am not a real novelist anyway, and that particular vice is inherent in writing a novel in the first person, which one should never do. One difficulty I have never solved is that one has masses of experience which one passionately wants to write about, e. g. the part about fishing in the book, and no way of using them up except by disguising them as a novel.<sup>55)</sup>

この発言の“using them up”ということば自体に，書きたいと思う主観的な題材がある種の心理的負担と圧迫感を与えるが，文学的表現をえてようやく解放されることがうかがえる。小説というジャンルに対する根本的なひとつの不満を示しつつも，心の揺さぶりを覚える「山ほどの体験」を記録するとなれば，人物，状況，背景，筋のもり上りを創出しなければならないことへの疑念ではあったが，激しい情感を表現するためには，ひとつの媒体となっ

ているのである。

この Symons の『空気を求めて』評へのオーウェルの率直な言葉は、想像力の欠如を認めているとともに彼の著書が多くの類似性を持っていることを証明することになる。また、彼は自分の小説について James Joyce や D. H. Lawrence に大きな影響を受けていることも述べている。一例をあげれば、『ユリシーズ』は現代ではほぼ常態といえる恐ろしい絶望感を私の知っているいかなる書よりも見事に集約している<sup>56)</sup>と Brenda Salkeld に、また別の日の彼への手紙でジョイスの面白さを熱心に説くことや、ポーリングの愛読書に *Sons and Lovers* があり、*Lady Chatterley's Lover* の Mellors と同じくポーリングは戦時中には士官にも出世したし、一時は紳士の仲間入りもできたことでもわかる。『チャタレイ夫人の恋人』で、'Ours is essentially a tragic age, so we refuse to take it tragically. The cataclysm has happened, we are among the ruins' と書き出した Lawrence は、次の手紙でも次のように暗い予測をたてている。

I am so sad, for my country, for this great wave of civilisation, 2000 years, which is now collapsing, that it is hard to live. So much beauty and pathos of old things passing away and no new things coming... the winter stretches ahead, where all vision is lost and all memory dies out.<sup>57)</sup>

すべてが無に帰す戦争の危機に直面して、今滅びようとしている文明、これを最大のテーマに意図したとみられる『失われし時を求めて』(*Remembrance of Things Past*), 『魔の山』(*The Magic Mountain*)との延長線上に『空気を求めて』がある。

しかし、未来が暗い前兆を示していても、オーウェルが内戦のスペインをあとにしてイギリスに帰国の車中から見る南イングランド、そこはおそらく

世界でもいちばん平和で穏やかな風景であったにちがいない。

The industrial towns were far away, a smudge of smoke and misery hidden by the curve of the earth's surface. Down here it was still the England I had known in my childhood: the railway-cuttings smothered in wild flowers, the deep meadows where the great shining horses browse and meditate, the slow-moving streams bordered by willows, the green bosoms of the elms, the larkspurs in the cottage gardens; and then the huge peaceful wilderness of outer London, the barges on the miry river,……— all sleeping the deep, deep sleep of England, from which I sometimes fear that we shall never wake till we are jerked out of it by the roar of bombs.<sup>58)</sup>

ローワー・ビンフィールドでボーリングが「昔の市場」で見たものは「爆撃機」であり、耳にした音はすごい「爆音」であった。不安、恐怖の影を浮彫りにするため、オーウェルは「爆撃機」を絶えず利用してきた。『空気を吸いに』も、爆撃機から近い将来という爆弾を眠っている現実の世界の中へ、ものすごい音をたてて投下したのは、「墓場へ、汚物だめへと」「下へ下へと向かっている」(168頁)時代であることを「眠っている」読者に知らせるためである。

この爆弾は、事故のため平時に落ちたものであるが、どこにしようと逃れられぬ殺戮と文明破壊を主人公に確信させる。

I have known since about 1931 that the future must be catastrophic.  
…… Since 1934 I have known war between England and Germany was coming, and since 1936 I have known it with complete certainty.  
I could feel it in my belly.<sup>59)</sup>

オーウェルの書くもののなかに『1984年』へと流れている底流が即ち、戦争が迫っていることへの警告とみるのは穏当な見方であろう。この観点をとるのは、Tom Hopkinson, Bernard Crick そして Richard Rees<sup>60)</sup>であり、ノスタルジアの研究<sup>61)</sup>、他の作品同様、小説の名を借りた自伝としての記録性<sup>62)</sup>と見る批評家、あるいは住宅政策批判の書と受けとる批評家<sup>63)</sup>もいる。それぞれの研究家の個性的観点の相違であろう。『1984年』の主人公ウィンストン・スミスとの共通点からいえば「『空気を求めて』はオーウェルの作品のなかで、主人公が直面する問題解決が、本質的に内面に求められた最初の作品<sup>64)</sup>」と言う Robert A. Lee の見解および G. Woodcock の‘進歩への懸念と疑念’を表わしたものととらえるのが最も妥当と考える。機械文明と社会の進歩について、オーウェルは社会主義との関連で言及したのは『ウィガン波止場への道』(The Road to Wigan Pier, 1937)であったが、この系列線上にあるのが『空気を吸いに』である点に異論はあるまい。オーウェルの言葉をかりると、‘進歩’というまやかしものが勢力をはって子供の頃から知っているよき生活を食いちぎっていると指摘した G. Woodcock の作品評を引用して拙稿の結びとしたい。

*Coming Up for Air* stands beside Henry Miller's *The Air-Conditioned Nightmare* and Aldous Huxley's *Brave New World* as one of the great modern denunciations of the evils that grow out of an uncritical belief in progress, of an acceptance without discrimination of all, good or bad, that the machine age may have to offer. Nevertheless, it is well to remember that *Coming Up for Air* is a work of fiction, and that Orwell is using—as he pointed out that Huxley had done——“the exaggeration of caricature.” George Bowling represents that side of Orwell's mind which reacted emotionally and with great revulsion against the modern mechanical world, which

found manual work extremely satisfying.<sup>65)</sup>

---

### Notes

- 1) A. J. P. Taylor, *English History 1914–1945* (Oxford Univ. Press, 1965), p. 317.
- 2) 富岡次郎『イギリス社会主義運動と知識人』三一書房, 1980年, 258頁。
- 3) Garbriel Jackson, *A Concise History of the Spanish Civil War* (London, 1974), p. 43.
- 4) 横田喜三郎「スペインの内乱と不干渉協定」『国際法外交雑誌』35-8。
- 5) Hugh Thomas, *The Spanish Civil War*, 3rd ed. (London, 1986), p. 985.
- 6) E. H. Carr, *The Comintern and the Spanish Civil War* (London, 1984), p. 27.
- 7) George Orwell, 'Looking Back on the Spanish War' in *The Penguin Complete Longer Non-Fiction of George Orwell* (Penguin Books, 1983), p. 484.
- 8) *Ibid.*, p. 484.
- 9) Gabriel Jackson, *The Spanish Republic and the Civil War* (Princeton, 1965), p. 539.
- 10) George Orwell, 'Homage to Catalonia' in *The Penguin Complete Longer Non-Fiction of George Orwell* (Penguin Books, 1983), p. 339.
- 11) *Ibid.*, p. 433.
- 12) *Ibid.*, p. 434.
- 13) *Ibid.*, p. 434.
- 14) *Ibid.*, p. 466.
- 15) *Ibid.*, p. 304.
- 16) *Ibid.*, pp. 485-6.
- 17) *Ibid.*, p. 488.
- 18) *Ibid.*, p. 333.
- 19) George Orwell, *The Collected Essays, Journalism and Letters of George*

- Orwell* (以下 *C. E. J. L* と略す) (Penguin Books, 1970), Vol. I, p. 301.
- 20) *Ibid.*, p. 28.
  - 21) George Orwell, *Coming Up for Air* (Penguin Books, 1962), p. 226.
  - 22) *Ibid.*, p. 8.
  - 23) *Ibid.*, p. 142.
  - 24) *Ibid.*, pp. 21-2.
  - 25) *Ibid.*, p. 23.
  - 26) *Ibid.*, p. 23.
  - 27) *George Orwell, C.E.J.L.*, Vol. I, p. 406.
  - 28) *Ibid.*, p. 381.
  - 29) *Ibid.*, p. 400.
  - 30) *Ibid.*, pp. 391-2.
  - 31) *Ibid.*, p. 398.
  - 32) Bernard Crick, *George Orwell : A Life*, (Penguin Books, 1980), p. 364, cf. *C.E.J.L.* Vol. I, (Penguin Books 1970), pp. 373-5.
  - 33) *Ibid.*, p. 369.
  - 34) *Ibid.*, p. 370.
  - 35) *Ibid.*, p. 370.
  - 36) Jeffrey Meyers, *A Reader's Guide to George Orwell* (Thamas & Hudson, 1975), p. 102.
  - 37) *Ibid.*, p. 104.
  - 38) George Orwell, *Coming Up for Air* (Penguin Books, 1962), p. 27.
  - 39) "Poetry and the Microphone" (1943) ; George Orwell, *England Your England* (London: Secker & Warburg, 1954), p. 86.
  - 40) George Orwell, *Coming Up for Air*, p. 30.
  - 41) George Woodcock, *The Crystal Spirit* (Boston: Little Brown, 1966), p. 238.
  - 42) George Orwell, *Coming Up for Air*, p. 106.
  - 43) A. J. P. Taylor, *English History 1914-1945*, p. 1.
  - 44) George Orwell, *Coming Up for Air*, p. 37.

- 45) *Ibid.*, p. 74.
- 46) *Ibid.*, p. 74.
- 47) *Ibid.*, p. 74.
- 48) George Orwell, *C.E.J.L.*, Vol. I, p. 26.
- 49) George Orwell, *Coming Up for Air*, p. 225.
- 50) *Ibid.*, p. 232.
- 51) *Ibid.*, p. 173.
- 52) *Ibid.*, p. 145.
- 53) *Ibid.*, p. 149.
- 54) *Ibid.*, p. 55.
- 55) George Orwell, *C.E.J.L.*, Vol. IV, p. 478.
- 56) George Orwell, *C.E.J.L.*, Vol. I, p. 145.
- 57) Harry Moore (ed.), *The Collected Letters of D. H. Lawrence*, Vol. 1(New York, 1962), p. 378(to Lady Cynthia Asquith, November 1915).
- 58) George Orwell, *The Penguin Complete Longer Non-Fiction of George Orwell* (Penguin Books, 1983), p. 467.
- 59) George Orwell, *C.E.J.L.*, Vol. II, p. 392.
- 60) Tom Hopkinson, *George Orwell* (Writers and Their Work, No. 39. Longmans, 1953), p. 27; Richard Ress, *George Orwell* (London: Secker & Warburg, 1961), p. 80; Bernard Crick, *George Orwell : A Life* (Penguin Books, 1980), p. 369.
- 61) Richard J. Voorhees, *The Paradox of George Orwell* (Purdue University, 1959), p. 109.
- 62) Christopher Hollis, *A Study of George Orwell* (London: Hollis & Carter, 1956), p. 112.
- 63) Laurence Brander, *George Orwell* (London: Longmans, 1965), p. 150.
- 64) Robert A. Lee, *Orwell's Fiction* (Notre Dame: University of Notre Dame Press, 1969), p. 102.
- 65) George Woodcock, *The Crystal Spirit: A Study of George Orwell* (Boston: Little Brown, 1966), pp. 243-4.